

栄養失調による犠牲者は四、五十名も出る。私も部下だった友の死に直面し、埋葬に参加した。零下四〇度を超す寒さ、凍りついた大地、穴を掘ろうにもなかなか掘れない。薪を焚き、凍った土を溶かしては掘る。

二十センチも掘り、ようやくその中に入れて、見えぬ程度に土をかけるころには長いシベリアの冬の夜空も白み始める。友には済まぬと思いつながらいかんともしがたく、恨まずに成仏してくれよと手を合わせて帰る。いつ自分の番が回ってくるかと思えば心細くなる。

長かった冬も終わり春になるころ、パン工場もでき、少しはましな物が食べられるようになる。夏も過ぎ、二度目の冬も何とか乗り切り四月に入ったころ、東京ダモイの話が出る。また騙されるのかと半信半疑でいたが、貨車に乗りナホトカへ着く。日本に帰れると思いい込み下車。待ち受けていたアクチーブと称する連中、「君たちは民主教育ができていない、ここで民主教育を受けないと帰さない」と言う。帰国用とは別の収容所へ入れられる。

昼は鉄道工事、夜は民主教育の日々が続く。朝くれ

る二食分のパンを一度に食べ、空の飯盒を持っていき、昼にはコンブや海藻を取ってスープで空腹を満たす。疲れて帰っても夜は民主教育、アクチーブによる講義。民主教育を終えなければ帰国できないと言われ、仕方なく受ける。

昭和二十二年の十月も終わるころ、復員船に乗りナホトカを出航。日本海に出ると嵐に見舞われ、船は木の葉のごとく揺れ、船酔いはひどく、最後の試練に遭いながら、十月三十日、舞鶴に上陸することができた。

シベリア抑留記

静岡県 内田 正次

静岡県小笠郡東山口村伊達方一二九、一三五ノ合併番地で、四人兄弟の次男として生まれる。

東山口村小学校高等科卒業、静岡市葵町の中村洋服店へ奉公、昭和十二年六月から十四年二月まで。昭和

十四年四月滿州開拓青少年義勇軍入隊。昭和十五年六月ごろ入滿、北滿鉄驪に入隊。昭和十五年六月ごろ北安省通北に移動。十七年五月ごろ北安省李家に入植。

昭和十九年十月徴兵、間島省琿春一二二五部隊へ入隊。軽機分隊として一期の教育を二十年四月終了。このころ滿州全土から根こそぎ補充兵の徴集があり、この兵の教育に回される。二十年七月、西東安の特別下士官教育隊に出張を命ぜられる。八月、日ソ開戦と同時に、一区隊三十名が隣部隊砲兵隊の警備中隊として配属される。横道河子にて終戦を知ったのは山の中である。

日本の将校がただ一人で知らせにきた。中隊長がなかなか承諾しなかったのを覚えていた。横道河子の近くの駅と覚えているが、武装解除。そのすぐ後、拉古の収容所に集められる。ソ連占領下におけるソ連軍、現地人は静かであった。武装解除のとき、何か起こると思っていたが、中隊長ら上官より順に武器を渡し、何事も起こらなかった。積み上げられた武器を見て、今まで命より大切にしてきたことを思うと涙がとまら

なかった。手入れが悪いといつては殴られたことを思うと、言いようのない悔しさがこみ上げてきたのを覚えていた。

拉古の収容所の生活は食糧の確保が主であった。兵隊二十名ぐらいがソ連兵の監視の中で滿州人の農場荒らしの毎日だった。食糧は、秋の最中のこと、トウモロコシが主、たまには稲のある所に行ったこともあった。滿人も必死な思いで、大鎌を振り回したり銃を撃ってきたりで大変だった。鎌や銃の犠牲になった兵も数多くいたことを覚えている。稲はモミを手ごきしてよく日に干し、板と板を擦り合わせて、皮を除き、鉄帽だったか一升瓶だったか覚えていないが気長に搗いて白くした。トウモロコシは焼いて食べ、残りは実をほぐし袋に入れ貯えていた。いつまでいるかわからないので、食べる分を節約して貯えを多くした。自分も三升ぐらいは貯えができた。

このお陰でライチハ収容所に着いてから長い間助かった。

牡丹江からニコリスク回りでシベリア鉄道を北上、

二十年の十月二十日ごろの出発だったと覚えている。

東京ダモイと言われて有蓋貨車で上下二段のすし詰め、小便は隙間から、大便は駅に着いたときだけ。

太陽の方角から列車が北に向かっていることを知り、騙されたと気がつき愕然とする。以来、話をする人もなく寝込む兵が多かった。食事は駅に着いたときも量が、量は少なくスूपが多かった。貯えておいたトウモロコシが役に立つ。残りも大切にした。列車に乗ってから五日ごろからか栄養失調の兵が見られるようになった。耳が紙のように薄く白くなり、目も落ち込み、見た目にも気の毒である。自分もどのような顔を、どのような格好をしていたことか。駅に着いて自分も何回か大便をした。どこへ行っても大便大便で大変だった。

十月の二十七、八日ころだと思う。ライチハ駅に着く。寂しい駅だったように覚えている。駅より収容所まで十キロ程度だったと覚えている。丘を上り下りするとき見た兵たちの行列は、背のうに夜寝るときのむしろをまきつけ、缶詰の缶を幾つもぶらさげ、からん

からんと音をさせて歩く姿は全く乞食同様の情けない姿であった。

収容所に着いてまず行われたのが持ち物の検査だった。特に刀物など徹底的に調べられた。宿舎はかなり大きな建物で、元は軍の兵舎とか倉庫のようなものであった。中は二段式のベッドになっていた。比較的きれいな整った所だった。先に来た兵隊たちが四、五千名はいたと思う。着いてすぐ十一月三日（明治節）、皇居還拜をする。抑留の身の何と悲しいことか、言いようのない悔しさがこみ上げてきたのを覚えている。

着いて二、三日は作業もないようだった。我々の部隊はもともと混成部隊一四二大隊で先の拉古収容所に編成されたもので、今回収容所に来て一四二大隊を中心に文化大隊が編成され、この大隊に自分も編入される。昔洋服屋にいたことがあり多少針仕事ができるので、被服の修理屋として翌年二十一年五月ごろまで過ごしたと思う。

当時、二十年の末から二十一年五月ごろにかけて食糧事情も特に悪く、塩のスूपに小麦粉の団子三個ぐ

らいが一日三回、五日も続いたこともある。また、数の子が入るとこれまた三日も四日も、鮭が入ると朝夕というように、ばっかり食がよく続いたものであった。極端な環境の変化と、それに伴う零下二〇度―三〇度という寒さの中のノルマの達成は困難を極めるものがあつた。我々にはちよつと表現できない状況であつた。こうした状況の中で、私はストーブのある家の中の仕事につくことができてありがたく思つた。

十年も昔の一年余りのわずかな間の手習いがこんな時に活かされるとは、神のみぞ知るといふものであつた。

こうした恵まれた中にあつても栄養失調の三期まで落ちたこともあつた。ライチハは露天掘りの炭鉱の町で、火力発電所、製材所工場等、炭鉱の町として必要施設のあつた小さな町で、収容所も周りに三方所ばかりあつた。シラミ、南京虫にはどのくらい眠れない夜を過ごしたことか。衣服の消毒又は入浴などは比較的早い時期から実施したように覚えている。衣服の消毒はポイラーによる滅菌消毒兵が入浴中に終了する。文化大隊にはいろいろな職業があつた。その中にクリー

ニング屋があり、一週間一回の割合で入浴と同時に下着の取り換えが行われた。このころよりシラミが少なくなつた。初めのうち、首のまわりなど腫れあがりボタンがはまらないほどになつたこともあつた。

春になつて、被服の修理屋から収容所の外の仕事に就くことになる。製材所の片づけなど、ノルマは達成できなかつた。ノルマの達成が長い間できないときには、責任者が赤軍の本部に呼ばれ注意を受けたようである。製材所の仕事は二カ月くらいであつた。それから製材所の監督の家を建てることになる。五人ぐらいで二人用の大きな鋸と手斧、ノミ、差し金など、差し金などは自分でつくつてから始めた。苦勞したことを覚えてゐる。それでも一軒どうやら建てる事ができた。建て終わつてからはまた屋内の仕事に戻る。建具大工である。ソ連人職人は細かい仕事は苦手なので我々は随分と重宝がられた。おかげでノルマも一五〇%は達成できた。この仕事に二十一年八月ころから二年間近く勞役に就いた。ソ連人労働者と一緒の屋根の

下で働いた。収容所から一キロメートルの所で、道中監視兵なしである。パスポートだけで通行できた。一般の兵と比べ恵まれていた。

ダモイの三カ月ぐらい前に、三十名の作業班長を命ぜられ、機械工場の建設をすることになる。土木建設の経験もなく、全くの素人が。ソ連式の考え方はどうなっているのだろうか。通訳を通して図面を見てもなかなか思うように仕事ができなくて困ったことを覚えていた。苦勞に苦勞を重ねた挙げ句、中桁の枠を組むときになって高さを見ると、二十センチの差が出た。通訳に話し監督には黙ったまま仕事を続けたが、その日収容所に帰ったところ突然のダモイ。それが作業班で自分ただ一人である。作業現場のことを思うと小踊りして喜びたかったが、作業班の人たちのことを思うと複雑な気持ちだった。それでもやっと帰れるという気持ちは本当にうれしかった。

抑留生活を振り返って

滋賀県 中村 藤市

昭和十九年十二月一日、三重県鈴鹿市中部二二八部隊に現役兵として仮兵舎に入隊いたしました。昭和二十年一月五、六日、朝早く出発、下関より朝鮮を通り満州の新京一六六八部隊に入隊いたしました。

昭和二十年八月十五日、当時は吉林の南西におりまして、そこで終戦を聞きました。それから吉林大学に入りました。九月初め千人を大隊として吉林を出発、ブラゴエシチェンスク（ソ領）に入りました。そして九月中ごろまでおりました。

ブラゴエシチェンスクを出発、ダモイ東京とソ連兵士に言われて左右二段式となった貨車に五十人余り乗り、四十台前後の貨車でブラゴエシチェンスクを夕方出発しました。翌朝明けてみれば東どころか西向きで、バイカル湖のそばを通り、今さらながら捕虜というこ